

対抗軸『北欧』を考える

1925年生れ。脳性まひの重度障害をもちながら、俳人・著述家として活躍。身体障害同人誌「しのめ」主宰。JD(当初は、国際障害者年日本推進協議会)発足の1980年から副代表を務め、現在JD顧問。

選挙後の流動??が、ピークを迎えつつある頃だろうか。

世論調査とやらが関心度の高さを謳い上げても、妙に冷えたものが、心を沈めてしまっていた。

ご当人たちがマスコミが騒ぎ立てる“対立”も、結局は政権限定のもので、憲法軽視も、アメリカオンリーの理念の無さも、変りがあるとは思えないし、政権交代でバラ色の世を歌われても、郵政民営化こそ、バラ色への決め手だったはずだ。そして、官僚・公営に諸悪をおっかぶせて、自分たちを聖域化するの、全く同じではないのか。

そんな絶望的な虚しさに、明白な対抗軸のあることを、考えさせてくれるものにつかった。

アメリカナイズからは距離を置いていそうな北欧。そう、タイトルでももうお判りと思うが、本誌出色の連載が、さらに豊富な写真を添えて、より親しめる一冊に纏められた快著『北欧 考える旅』だった。

愛読者も多かったはずだし、社事大の佐藤先生を始め、克明に読まれて高く評価されている推奨文も、多く眼にすることが出来る。だからここでわざわざ書評など加える必要もないし、やる気も無い。勝手にネタに使わせてもらうだけだ。

◇ ◇ ◇

シンプルで鮮明なカバーが、先ず本書の内容を伝えてくれる。澄んで深く湛えた湖の色を想わせる青の縁どり、線描きされたやや太目の3人の高校生たちだ。人間万歳(というのにはちょっと派手かな?)を象徴するように、頼もしさと、親しさと、優しさをそれぞれに備えた人々の姿だ。それも普段着というより働き着のそれだ。

そして1人でも2人でもなく、3人という数は、社会の構成の原点を示す数ともと取れるし、キャラクターとして表わせる最少数かもしれない。

つまりこれは、思いやりと個性を重んじる、深みを湛えた人々の、飾らない日常生活を通して、誰でもが安心して楽しく、生き続けられる社会を、現実実感しているという感動が、地味だけれど自然に響きあっている図とも言えよう。

◇ ◇ ◇

読むというより、開けたページで偶然に、眼に飛び込んできたものだけでも、結構、刺激にはなってくれる。

——北欧では、障害があろうがなかろうが、18歳になれ

ば子どもは家庭から独立し、それ以後は社会が責任を持つ

どうも一見していない者には、信じ難いような基盤が、見事に根付いていればこそ、誰でもが高齢や障害者になる可能性を実感として共有出来て居ればこそ、その備えも共有で築く気にもなれる。それ無しに負担の共有を求めても、世論は流れ去ってしまうだけ。なにせ、医療保障のスタートにさえ、ブレーキを掛ける勢力の根強い国の、完全影響下にあるこの社会だ。介護保険も自立支援も、責任の所在はすべて、社会ではなく家庭に押し付けられているとしても何の不思議も無い。

以前なら、日本型福祉を顧みる、なんてセリフも出ただろうが、そのベースであるべき家庭が、推進?された核家族化によって、支える体力など何所にも残されては居ない。

社会化へ向かうどころか、家庭からさらに本人自身への責任移譲が見え見えになってきているのだ。そんな逆走?が、妙なプライバシー・個人尊重の風潮を追い風に、加速しそうな現状では、30年・3代と開いてゆくと見えたトプランナー北欧との差は、時とともに広がるのでは…。

◇ ◇ ◇

インクルージョン。場を同じくすることだけが目的では駄目だ、とする明確な指摘に惹かれた。

普通校・普通学級に行けば普通?になれるとばかりの、養護学校反対運動への積年の不満が少し軽くなった。教育の内容を守るために、一番身近な現場限定にしろ、分離は行なわれている。

場よりも、内容・質の重視を意図した教育が、初期の肢体不自由児校では実践されていた。特別支援などと特別に意識したものではないはず。

あちらのパソコンに熱心な校長が、一方で字を書かせることに力を注いでいた。という見学記事が、私に麻布時代の“光明”を蘇えらせた。

現在では想像も付くまいが、当時、上肢の麻痺が相当にある子でも、可能な限り、毛筆の習字までさせていた。氣遣って最初からやらせないのではなく、チャレンジする機会は与えていたのだ。苦闘はしたけれど、おかげで現在、色紙に揮毫という芸当も案外平気でこなしている…。

《やはり、かじり掛けただけで書評などには至っていない。これからじっくり読んで考えたい》